

本調査の特徴

本調査は、子どもたちを取り巻く社会状況や教育環境が変化するなかで、子どもたちの生活全般にわたる意識や実態をとらえることを目的に実施された。小学4年生から高校2年生まで、ほぼ同一の項目で調査を実施しており、発達段階による違いを比較することができるのが大きな特徴である。また、今後の子どもたちの変化を追うことが可能となるよう、経年での比較ができるように配慮した調査設計がなされている。

本調査の特徴は以下のようにまとめられる。

1. 子どもたちの生活全般にわたる意識や実態を幅広くとらえることができる

生活時間、パソコンや携帯電話といった急速に普及するメディアとの接触状況、親や友だちといった周りの人々との関係、学習に対する姿勢や目的など、ベーシックな内容を幅広く質問しており、子どもたちの日々の生活の様子を浮かび上がらせることができる。

2. 生活の様子と学習との関連を把握することができる

子どもたちの生活スタイルと学習行動や意識との関連をみることができる。子どもたちの学習行動を、学習という枠組みのなかだけでとらえるのではなく、日々の生活のなかに位置づけることができる。

3. 発達段階における違いをとらえることができる

小学4年生から高校2年生まで、ほぼ同一の項目で調査を実施しており、生活スタイルや周りの人々との関係、学習行動などが、発達段階によってどのように違っているのかを、正確に比較することができる。

4. 経年比較に配慮した調査設計をしている

調査設計にあたっては、経年比較が可能なように、子どもの生活を考えるうえで基本的な項目を選択して、調査内容を構成した。

調査概要

1. 調査テーマ

毎日の生活の様子や、親や友だちとの関係、学習の様子など、子どもたちのベシク生活の実態・意識をとらえる。

2. 調査方法

学校通しの質問紙による自記式調査

3. 調査時期

2004年11月～12月

4. 調査対象

小学4年生～高校2年生 合計14,841人（有効回答数）

※データの集計にあたって、一部の項目では、学校単位で「無回答・不明」が多かったため、学校単位で集計から除外した。

※以下、小学4年生を「小4生」、中学1年生を「中1生」、高校1年生を「高1生」のように表記する。

5. サンプルの抽出方法

市区町村の人口規模および人口密度を考慮した有意抽出法

※調査対象者が生活する都市の規模によって回答に偏りが生じないようにするため、あらかじめ市区町村の人口規模と密度を考慮した3つの地域区分を設定し、調査地域が全国に散らばるようにサンプリングを行った。具体的には、以下のとおりである。

- ・市区町村の人口密度と人口規模を考慮して、以下の3地域区分を設定。
「大都市」（東京都内）、「中都市」（地方中規模都市：人口密度が中／人口規模が20～30万人程度）、「郡部」（町村部：人口密度が低／人口規模が1～2万人程度）
- ・各地域区分に該当する市区町村のなかから、ランダムに複数の市区町村を抽出。
- ・抽出した複数の市区町村から、さらにランダムに学校を抽出し、調査を実施。

※なお、高校生については、上記3地域区分に加え、学校の種別や偏差値層の影響も考慮してサンプルを抽出した。

6. 調査項目

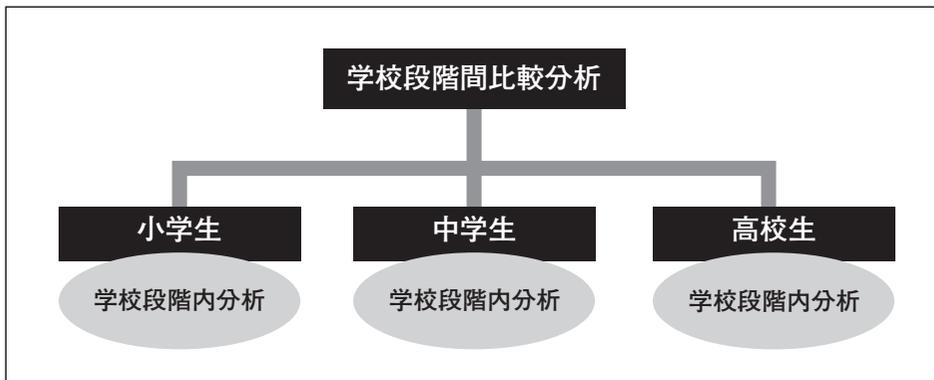
起床・就寝時刻／食事のとり方／遊び場／部活動・アルバイト（中・高生のみ）／テレビ・ビデオ（DVD）の視聴時間／テレビゲームの使用時間／パソコン利用／携帯電話の利用／ふだんすること／小さいころの体験／おこづかいの金額・使い方／親との会話／親とのかかわり方／友だちのタイプと数／友だちとのかかわり方／異性とのかかわり方（中・高生のみ）／自分自身について／満足度／なりたい職業／職業選びで大切なこと（中・高生のみ）／進学希望／家での学習時間／学校外学習／学習の取り組み方／得意なこと・苦手なこと／勉強する理由／成績の自己評価

分析枠組みとサンプル数

分析枠組みとサンプル構成は以下のとおりである。

分析枠組み

本報告書では、小学生・中学生・高校生の各学校段階内での分析、および学校段階間での比較によって分析を行う。



サンプル数

(人)

小学生 (21校)				
	小4生	小5生	小6生	合計
大都市	528	477	455	1,460
中都市	529	503	462	1,494
郡部	437	419	430	1,286
合計	1,494	1,399	1,347	4,240

(人)

中学生 (13校)				
	中1生	中2生	中3生	合計
大都市	537	435	526	1,498
中都市	496	446	516	1,458
郡部	488	523	583	1,594
合計	1,521	1,404	1,625	4,550

(人)

高校生 (13校) *普通科のみ			
	高1生	高2生	合計
大都市	721	986	1,707
中都市	745	750	1,495
郡部	1,431	1,418	2,849
合計	2,897	3,154	6,051

小学生・中学生・高校生
合計サンプル数 14,841人

※本報告書では、成績（自己評価）や高校偏差値層による分析を行っている。詳細は以下のとおりである。

成績：小学生は国語・算数・理科・社会の4教科について、中学生は国語・数学・理科・社会・英語の5教科について、成績の自己評価をそれぞれ5段階で回答してもらった。それらの結果を合計して、ほぼ3等分になるように「上位」「中位」「下位」を設定して分析に用いた。

高校偏差値層：高校生は、学校自体の偏差値層による相違が大きいと思われるため、成績ではなく、高校偏差値層を分析に用いた。分類区分ならびに偏差値層ごとのサンプル数は以下のとおりである。

「進学校」…偏差値60以上目安。「中堅校」…偏差値50～59目安。「進路多様校」…偏差値50未満目安。

	高校偏差値層			合計
	進学校	中堅校	進路多様校	
大都市	618	632	457	1,707
中都市	621	725	149	1,495
郡部	1,255	1,007	587	2,849
合計	2,494	2,364	1,193	6,051

成績ならびに高校偏差値層の各カテゴリーの割合は以下のとおりである。

